



創
り
手
が
選
ぶ

創
り
手
の
た
め
の
賞
！



ATP AWARD 2024

40TH
ANNIVERSARY

ASSOCIATION OF ALL JAPAN
TV PROGRAM
PRODUCTION COMPANIES
AWARD

第40回ATP賞
テレビグランプリ
受賞作を振り返る

CREDIT

◆審査委員会

審査委員長 松葉 直彦（テレビマンユニオン）

ドキュメンタリー部門 審査委員

奥村 健太（メディア・ワン）
煙草谷 有希子（ドキュメンタリージャパン）
深見 将史（スローハンド）

情報・バラエティ部門 審査委員

阿部 裕太（テレビ朝日映像）
堀江 昭子（ハウフルス）
梶川 斉（やんかわ商店）

ドラマ部門 審査委員

木曾 貴美子（メディアミックス・ジャパン）
唯野 友歩（AOI Pro.）
松木 創（共同テレビジョン）

◆新人賞

審査委員長 山本 妙（パオネットワーク）
審査委員 石田 麻衣（ホリプロ）
中川 奈緒（東阪企画）
野中 翔太（AX-ON）
柳田 香帆（テムジン）

◆総務大臣賞

審査委員長 浜野 高広（GV Tokyo）
審査委員 大場 吾郎（佛教大学社会学部）
金川 雄策（LINE ヤフー）
品田 英雄（日経 BP）
千野 成子（Empire of Arkadia）

第40回ATP賞テレビグランプリ受賞式
2024年8月8日（木）
東京プリンスホテル 2F プロビデンスホール

司会・進行

杉山 真也（TBSテレビ） 合原 明子（NHK）

主催

一般社団法人全日本テレビ番組製作社連盟

後援

総務省 経済産業省
日本放送協会 日本民間放送連盟

ATP 賞 40 周年記念

若手クリエイターズフォーラム
助成 公益財団法人 放送文化基金

THE 40TH
GRAND PRIX

金曜ドラマ

不適切にもほどがある！

TBS スパークル／TBS



グランプリ THE 40TH GRAND PRIX

● ドラマ部門 ● 最優秀賞

金曜ドラマ

不適切にもほどがある！

TBSスパークル／TBS



脚本 宮藤 官九郎(大人計画)
プロデューサー 磯山 晶(TBSスパークル)、天宮 沙恵子(TBSスパークル)
演出 金子 文紀(TBSテレビ) / 音楽 MAYUKO (ワンミュージック)
撮影 伊澤 昭彦(TBSアクト) / 照明 大金 康介(TBSアクト)
音声 中山 大輔(BULL) / 編集 松尾 茂樹(TBSアクト)
美術 岡嶋 宏明(TBSアクト)

受賞者コメント

この度は第40回グランプリに選んでいただき、誠にありがとうございました。特に「制作者の皆様を選んでいただいた」ことを、身に余る光栄だと思っています。宮藤官九郎さんとドラマを作ってきた25年が一つの形になった、という実感です。今までも懸命に物語を紡いできたつもりでしたが、今回ほど世の中の人々からビッドな反応をいただいたのは初めてでした。それくらい宮藤さんの脚本が時代の空気を捉え、阿部サダヲさんのお芝居が的確で素晴らしいものだったのだと思います。

第一話を放送する前はヒヤヒヤしていた、「一番言いたいことを歌って踊る」という手法も受け入れられて、本当に良かったです。終わってみれば、時代とともに変遷する「適切・不適切」を、視聴者の方々が家庭や職場で話し合ってくださったから、このドラマは育ったんだという印象です。最後になりましたが、この番組を心から楽しんで、関わってくださった全ての皆さま、本当にありがとうございました。

プロデューサー 磯山 晶(TBSスパークル)



講評

まさにタイトルが物語る「不適切にもほどがある！」は、挑戦的な風刺喜劇であり、観測しながらひとの本質に迫る高い企画性と普遍性を併せ持った素晴らしい作品だ。世の中は共存のためのルールを真剣につくり、守り、そして流行は去り、また新しいルールができる。「ふてほど」は、昭和と令和、二つの時代の差を描きながら、二つの時代に生きるひとの心に差はないことを描く。

唯野 友歩

投票者からのコメント抜粋

- ◆いずれも選考した両作品に共通するのは飽きさせない内容と演出法でした。特にドラマ「不適切にもほどがある！」は時代の際書きを行く作風で、我々業界人もどこか懐かしく身につまされる思いで毎回拝見していたのではないのでしょうか。久々に翌朝、関係各所で「昨日のドラマ観た？」的な会話が交わされていたように思いました。今後もこのような時代を逆手にとった作品が出続ければ、テレビ斜陽とは言わせない！かなー。当社も頑張ります。
- ◆グランプリ候補作、いずれも素晴らしい完成度で興味深く拝見しました。「よりマズに伝えたい」という信念を最も強く感じたので「不適切にもほどがある！」を選ばせていただきました。
- ◆50代からの目線で観ると、知っている時代のことがユニークに描かれていて楽しく、仕事を一緒にしているAD達とドラマの感想を話してみると「こんな時代あったの!？」という反応に私自身が驚き、幅広い世代を飽きさせずに楽しませるエンターテインメントとしては非常にいい作品だったと思います。

最優秀賞
THE 40TH BEST AWARD

● ドキュメンタリー部門 ●

新・爆走風塵 中国・トラックドライバー 生き残りを賭けて

テムジン、NHKエンタープライズ／NHK BSプレミアム、NHK BS4K



ディレクター 劉 珊珊(テムジン)
ディレクター・編集 高倉 天地(テムジン)
制作統括 鐘川 崇仁(テムジン)、夜久 恭裕(NHK)
鈴木 真美(NHKエンタープライズ)
取材 劉 璣(テムジン) / 音響効果 四元 慧也(mixtape)
撮影 趙 昶通

受賞者コメント

経済成長が低迷する中国で、トラックドライバーは想像を絶する困難に直面しています。そこでは欲望に負けて他人を騙したり、邪魔をしったりすることはあっても、信頼関係を築くことは容易ではありません。しかし、主人公の張はどんな状況下でも他人を信じ、困った人を見捨てません。不器用に「義」を貫き懸命に生きようとします。そんな小さき者の小さな物語が、国を超えて私たちに大切なことを教えてくれるように思います。

ディレクター・編集 高倉 天地(テムジン)



Ellen Kim釜山国際映画祭
アジアコンテンツ&フィルム
マーケット委員長からの投票コメント(日本語訳)

「この作品は、トラック運転手たちの生活を掘り下げ、人間の存在が第4次産業革命や世界的パンデミックといった途方もない変化によっていかに根本的な影響を受けるかを考察する注目のドキュメンタリーである。高地の危険なルートを通して、巨大な経済の枠組みの中で、個人がいかに時代遅れの生産手段に頼って日々生き延びているかを視覚的に象徴している。この作品は、トラック運転手の過酷な現実をとらえるだけでなく、より広範な社会経済的要因が働いていることを痛感させられる。」

奥村 健太

講評

テレビ番組を見ながら手に汗を握ったのはどれくらいぶりか。スケール感のある映像、ハラハラするシーンの連続。チベット…特に318号線に入ってから過酷な道のりは、ドローンを使った「魅せ方」も素晴らしいし、ディレクターの「企み」のあるカットが随所に見られた。張と劉の「バディもの」といった側面もある作品だが、トラックドライバー密着というミクロな世界から、中国の「今」を切り取ったという意味でも、傑作だと言える。

最優秀賞
THE 40TH BEST AWARD

● 情報・バラエティ部門 ●

市民X 謎の天才「サトシ・ナカモト」完全版

NHKエデュケーショナル／NHK BSI



ディレクター・制作統括 佐々木 健一(NHKエデュケーショナル)
撮影 藤田 岳夫(インフ)
音声 大川 和之(インフ)、田村 陽介(千代田ビデオ)
照明 中山 寛史(インフ) / 編集 宮田 耕嗣
CG制作 津田 晃暢(SANTY)
音響効果 尾形 香(メディアハウス サウンドデザイン)
コーディネーター 森山 絵里(オフィスFK)
制作統括 久保 健一(NHK)

受賞者コメント

「なんて難しい題材に手を出しちゃったんだ…」と何度も天を仰ぎました。何しろ主人公は“不在”。しかも、ネット上のコンピュータープログラムの話です。どちらも画になりません。苦悩の末、謎の天才を床に痕跡として描き、個別インタビューをまるで車座になって語り合っているかのように見せるメタバース風演出を思いつきました。この前代未聞のアイデアを具体的な映像にできたのは、10年来の付き合いの精鋭スタッフのお陰です。

ディレクター・制作統括 佐々木 健一(NHKエデュケーショナル)

講評

創り手が凡人ならば「わかりづらいから再現ドラマを挟む？」とか、「アニメカイラストを使ってNAで説明しなきゃね」となるところを、ほぼインタビューだけで完遂した潔さと構成力が凄かった。難しいテーマなのに解りやすい。しかもその同録の画がオシャレ。「謎の天才を推す人たちのオフ会」に、観る側を巻き込むような演出は普通じゃ出来ない。この番組の創り手も「謎の天才」なのでした。

堀江 昭子



ディレクター 山本 妙(パオネットワーク)
コーディネーター 鄭 銀淑(キーワード)
撮影 小谷野 貴樹(スパイラル)、濱野 実
編集 志和 海(ギトリ)
音響効果 細見 浩三
制作統括 松本 裕子(パオネットワーク)
堀川 篤志(NHKエデュケーショナル)
柳沢 晋二(NHK)



ディレクター 宗像 竜大
(東京サウンド・プロダクション)
取材 竹内 美穂(TopSpin Creative Corporation)
今井 こうき(東京サウンド・プロダクション)
音響効果 増子 彰
(東京サウンド・プロダクション)
編集 笹子 哲平
制作統括 赤上 亮(NHKエンタープライズ)
横山 友彦(NHK)



ディレクター 内田 利元(、、Film & Media)
撮影 岡野 崇(NHKテクノロジーズ)
撮影 鈴木 正美(Vision I)
音声 河合 清志(康三プロ)、向井 健造(Vision I)
映像技術 石原 史香(SCENE)
監音・音響効果 高木 創
編集 志和 海(ギトリ)
制作統括 寺岡 環(NHK)
齊藤 倫雄(NHKエデュケーショナル)

ザ・ヒューマン キム・ジャン ～解けよ、“美”の呪い～

パオネットワーク、NHKエデュケーショナル / NHK BSI

受賞者コメント

二人目の子どもが0歳の時に今の会社に入り、主にプロデューサーとして番組制作に関わってきました。どうしてもこの企画は自分でやりたくて…。ディレクターとして初めて全てを担当できた50分番組で、大変栄誉な賞を頂きました。社会の中で無自覚に形成された偏見や固定観念から、私たちが解放されるのはとても難しいことですが、そのような“呪い”を解く番組をこれからも制作していきたい。そう思える勇気を頂きました。

ディレクター 山本 妙
(パオネットワーク)

講評

痩せていることが美の基準の一つとして重くのしかかる現代、韓国のそれは想像を上回る過激さで女性たちに襲いかかっていた。母親に容姿を非難され摂食障害に苦しむ少女や、アイドルに自分を重ねてダイエットをする女性から、容姿にとらわれた韓国社会を批評する一方で主人公が運営するLサイズ以上の服の専門店が女性に自信を取り戻す瞬間を逃さない丁寧な取材に、人々が美の呪いから解放されるのを願う気持ちが伝わってきた。

煙草谷 有希子

ファミリーヒストリー

草刈正雄 ～初めて知る米兵の父 97歳伯母が語る真実とは～ 草刈正雄特別編～アメリカへ 決意の旅路～

NHKエンタープライズ、東京サウンド・プロダクション / NHK 総合

受賞者コメント

長い間、ドキュメンタリーの制作に携わっていても「人生が変わる瞬間」に立ち会うことは、なかなかありません。初めて父の顔を知った草刈正雄さん、草刈さんと対面を果たした米の親族たち…何人もの人生が変わる瞬間が詰まった記憶に残る番組となりました。出演を決心した草刈さんの勇気から敬意を表します。父の親族を探し当てるまでの取材の舞台裏にも奇跡のような出来事があり、スタッフの人生観も少なからず変わりました。

制作統括 赤上 亮
(NHKエンタープライズ)

講評

草刈正雄さんというトップ俳優の心が揺らぐさまを、こんなに生々しく捉えることができるのか！？父への複雑な思いに向き合う姿は並のドラマ以上にドラマティックでした。それを支えたディレクター＆スタッフのリサーチ力。探偵事務所も尻込みしそうなミッションを、恐らくは、テレビ制作者ならではの頓智を利かせたリサーチ力で見事完遂。リサーチはクリエイティブな作業なんだという原点を再認識しました。これぞテレビの底力！

深見 將史

ゴッドハンド 流転の秘宝を復元せよ

NHKエデュケーショナル、、、、Film & Media / NHK BS4K

受賞者コメント

今作はバラバラの陶磁器でも完全に復元する「神の手」の持ち主、藪山浩司さんと息子・悠さんに密着したシリーズ3作目。1作目から足掛け3年に渡り、間近でその仕事振りを拝見しましたが、藪山さんの「手業」は現代においてもAIが到達できない「最後の秘境」だと思います。この度は才気溢れるスタッフ陣による総力戦を評価して頂き、本当に嬉しく思います。藪山さんご一家を始め、かかわって下さった皆様に感謝申し上げます。

ディレクター 内田 利元
(、、Film & Media)

講評

なんだか怪しげな異界へといざなうような、ケレン味溢れる冒頭に、まず持っていられました。古美術の修復という敷居が高くなりそうな世界を、探偵ドラマ風味のスリリングな仕立てで見せていく趣向。中国清王朝の花瓶を修復する藪山親子の神ワザには圧倒されっぱなしの一方で、驚くのは番組の大部分を作業の手もとや表情など狭い画で押し切っていること。90分間持続する心地いい緊張感に、ディレクターのセンスと技量を感じます。

深見 將史



企画演出 稲葉 一馬(AX-ON)
プロデューサー 藤井 良記(日本テレビ放送網)
深谷 圭二(AX-ON)
村岡 克紀(AX-ON)
ディレクター 宮本 勇佑(AX-ON)
構成作家 後藤 祐生、伊藤 昌彦



プロデューサー 佐野 達也(、、Film & Media)
内田 利元(、、Film & Media)
ディレクター 佐野 達也(、、Film & Media)
カメラ 中村 賢二(、、Film & Media)
川口 慎一郎(海プロダクション)
制作統括 齊藤 倫雄(NHKエデュケーショナル)
寺岡 環(NHK)



演出・プロデューサー 高橋 弘樹(ABEMA TV)
プロデューサー 荒川 慧介(ABEMA TV)
片野 正大(ABEMA TV)、早坂 香里
永井 宏明(ユニット)、高橋 研
プロジェクトマネージャー 曹根田 祐士(ABEMA TV)
脚本 知良(ABEMA TV)
石井 結人(ABEMA TV)
ディレクター 豊川 康成、今井 雄大(DAIFUKU)
瀬本 卓(CRANKY)
木下 大輝(ゼロクリエイト)
亀田 剛(かめハウス)、足立原 円香
片岡 義典(ユニット)
柳澤 将喜(嵐山映像事務所)

五感を奏でる！オケ旅 オーケストラといっしょにたぴしょう

AX-ON / 日本テレビ

受賞者コメント

このような賞をいただけるとは大変光栄です。旅口ケにオーケストラを帯同させ、音楽もその場で収録してしまうという横着を受け止め、その奏でる音楽で番組自体を底上げしてくれた新日本フィルハーモニー交響楽団の皆さま、その熱演で音楽を笑いに变えてくれた出演者の皆さまには感謝しかありません。生の演奏が制作スタッフを含む全員に高揚感を生み、実にバカバカしく、贅沢な旅となりました。本当にありがとうございました。

企画演出 稲葉 一馬
(AX-ON)

講評

今の時代に街中で生オーケストラ！！ある意味「ブッ飛んだ」この発想力と行動力に敬意を表します。ロバートの秋山さんじゃなかったら成立していたのか！？と思わせる素晴らしい「笑い音楽」の融合。オーケストラの方達をあえて演奏に特化した演出にもこだわりがあって、今のテレビ業界においても「大切な何かを教えてくれる番組」ではないでしょうか。次回はアボなしバージョンも見てみたいです。

襲川 斉

レギュラー番組への道 世界の選挙から 中米 グアテマラ

、、Film & Media、NHK エデュケーショナル / NHK 総合

受賞者コメント

【求む！】この度はありがとうございました！この場をお借りし、当コンテンツの続編を共に作ってくれる有志を募集します。世界150カ国以上、国が違えば選挙も違う。世界中の選挙と民主主義を取材しませんか？会社として、個人として、自由なスタイルの参加で結構です。お金を集めるのか、手弁当で作ってから売するのか、そういうアイデアからも一緒に考えさせていただきたい。ご興味のある方は弊社ホームページ(「てんでんフィルム」で検索)までご連絡お待ちしております。

演出・プロデューサー 佐野 達也
(、、Film & Media)

講評

嫉妬した。なぜこの切り口を思いつかなかったのか？町中のテンションが上がり、熱気が匂いとなり立ち込め、金が飛び交う数週間。ヒーローもいればヒールも登場…。『世界の選挙』には、プロレスラーよろしく、その国のウソみたいなクセの強いキャラクターが一堂に集結する。『世界の選挙』を通じ、町の「いま」を正面から、時に背後からも映し出していたこの番組。製作者の切り口の鮮やかさと、リサーチ力に感服した。

阿部 裕太

世界の果てに、ひろゆき置いてきた

ユニット、DAIFUKU、CRANKY / ABEMA

受賞者コメント

アフリカ大陸横断中に、日々何が起るかわからない中でロケ現場を動かしてくださった演出の豊川D、柳澤カメラマン、瀧本D、高橋(研)P。ゲストをアattendしてくれた早坂P。帰国後にABEMAの演出プロデューサー高橋弘樹さんのもと毎回粘り強く編集を完遂したディレクター・ADのみなさんの尽力によって、世間で話題となり、多くのファンの方に支えられる番組になりました。いい機会をくれたABEMAさんと視聴者の皆さんに感謝します。

プロデューサー 永井 宏明
(ユニット)

講評

私は「ひろゆき」のことが苦手だった。しかし…「感情」や「情動」と対極にあると思っていた彼。そんな彼が、旅の中で出会った人々を通じて見せる意外なまでの「人間力」に驚き、心を動かされた。そして、ナミビアで世話になった家族に「虫歯の治療費」をプレゼント…すっかり魅了され術中にハマった。そんな彼の旅路は、さながら「現代の深夜特急」。バックバック片手に、また旅に出たくなった。

阿部 裕太

OUTSTANDING PERFORMANCE AWARD

世界ふしぎ発見！

レギュラー最終回 38年のありがとう！ 40000時間から厳選
世界ふしぎ発見！ベストワン映像 一挙大公開スペシャル！

テレビマンユニオン / TBS

受賞者コメント

ATP賞の優秀賞、ありがとうございます。この番組を制作した私たちスタッフはこの番組で、世界のすばらしさ、そこに住む人々のすばらしさを心から知ることができました。感動をしながら仕事ができる楽しさを満喫させていただきました。この賞はこの番組を制作させていただいた放送局、提供スポンサー、出演者、海外の多くの協力者、そして視聴者の皆さんとともに受け取りたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

企画 重延 浩
(テレビマンユニオン)

講評

「あんな場所に行ってみたいな！」子どものころ毎週家族で見ていた番組だ。38年間・取材映像40000時間は伊達ではなく、過去素材のパワーに圧倒されっぱなしの3時間だった。ネットのない時代の海外ロケ…昭和のディレクターたちはどうやって無理難題をクリアしてきたのか？運否天賦の撮影をいかに成功に導いたのか？現代のテレビマンたちに広く語り継いでいただきたい。

阿部 裕太



企画 重延 浩(テレビマンユニオン)
チーフP 國分 嶺雄(テレビマンユニオン)
プロデューサー 大塚 修一(テレビマンユニオン)
高木 昇(テレビマンユニオン)
藤田 慎一(テレビマンユニオン)
坂世 雅之(テレビマンユニオン)
演出統括 宮岡 義徳(テレビマンユニオン)
高橋 聡太(テレビマンユニオン)
ディレクター 小堺 有希子(テレビマンユニオン)
山崎 隆央(テレビマンユニオン)
福島 広子(テレビマンユニオン)
角田 沙也香(テレビマンユニオン)
村上 峻(テレビマンユニオン)
松崎 真雄子(テレビマンユニオン)
白田 太郎(テレビマンユニオン)
編成 福岡 寛子(TBSテレビ)、高田 侑(TBSテレビ)



原作・脚本・演出 源 孝志(オットィモ)
演出 西山 太郎(オットィモ)
音楽 阿部 海太郎
撮影 朝倉 義人(東映京都撮影所)
技術 近藤 将司(オットィモ)
制作統括 樋口 俊一(NHK)、八巻 薫(オットィモ)
プロデューサー 森井 敦(東映京都撮影所)
中森 幸介(東映京都撮影所)
石崎 宏哉(東映京都撮影所)

制作統括 八巻 薫
(オットィモ)

講評

記録を辿る旅の中で、そこにはいないひとのことを想い語らう。また会おうと約束する人々の絆が、時間の有限さを物語る。丁寧に切り取られたロードムービーは、人生に似ていて、振り返り、時に戻ることをしても、それらは全て前進なんだと教えてくれる。進むしかない人生を肯定してくれた素晴らしい物語と、妥協ない演出に胸を打たれた。劇伴も控えめだが確かに心地よく、出演された俳優陣のお芝居も素晴らしいかった。

唯野 友歩

ドラマ部門

プレミアムドラマ 「グレースの履歴」

オットィモ、東映京都撮影所 / NHK BSプレミアム、NHK BS4K

受賞者コメント

2022年、夏の終わりから秋にかけて、日本各地の美しい風景の中で、このドラマは撮影されました。ロードムービーのため、毎日、天候とスケジュールとのせめぎあいがあり、皆で苦労しながら作り上げた作品がこのように評価されて、大変光栄です。原作、脚本、演出を務めた源監督の世界を、情感豊かに表現してくださった俳優陣と、熟練の技で見事に映像化してくれた関係者の皆さんに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました！

ドラマ部門

連続ドラマW フェンス

NHKエンタープライズ / WOWOW プライム、WOWOW4K

受賞者コメント

新人時代に沖縄で事件記者をしていて、米軍犯罪を取材していた者の責任として、ドラマの力で沖縄の置かれている不条理な現実を伝えたいと考え、企画しました。沖縄の地域性を全ての面で徹底的に突き詰めていくことが世界に届くと信じて、脚本野木さん・松本監督・高江洲P、スタッフ・キャストが一丸となって作った作品です。今も沖縄の現実は何も変わっておらず、受賞をきっかけにこの作品が少しでも広がることを願っています。

プロデューサー 北野 拓
(NHKエンタープライズ)

講評

一見重めの社会派ドラマかと思いきや、番組全体としてきっちりエンターテインメントに仕上がっていて、最後までハラハラしながら興味深く見た。オリジナルな上に、ここまで要素を盛り込んでいる事に、様々な側面から沢山取材をされたのだろうと視聴しながら頭が下がる思いだった。フィクションであるドラマだからこそ、日本人が目を逸らしている社会問題を最後まで興味を持たせて伝える事が出来ている意義ある番組だと感じた。

木曾 貴美子



脚本 野木 亜紀子 / 監督 松本 佳奈
音楽プロデューサー 岩崎 太整
主題歌 Awich (UNIVERSAL J)
プロデューサー 高江洲 義貴(WOWOW)
北野 拓
(NHKエンタープライズ)



優秀賞

OUTSTANDING
PERFORMANCE
AWARD

ドキュメンタリー部門



キム・ジャン ～解けよ、“美”の呪い～



ファミリーヒストリー 草刈正雄



ゴッドハンド 流転の秘宝を復元せよ



五感を奏でる!オケ旅



世界の果てに、ひろゆき置いてきた



世界の選挙から 中米 グアテマラ



世界ふしぎ発見！



情報・バラエティ部門

ドラマ部門



「グレースの履歴」



フェンス



奨励賞

INCENTIVE AWARD



ディレクター 合津 貴雄(東京ビデオセンター)
三浦 渉(東京ビデオセンター)
アシスタントディレクター 高橋 紗希
(東京ビデオセンター)
撮影 川口 慎一郎(海プロダクション)
編集 前高 健治(ギトリ)
制作統括 齋藤 圭介(NHK)
佐々木 健一
(NHKエデュケーショナル)
川尻 健一(東京ビデオセンター)



語り 鈴木 杏(フォスター)
撮影 桜田 仁
音効 早船 麻季(TBSアクト)
コーディネーター 峯俊 直美
編集 一ノ瀬 裕明(アトリエ・NOA)
ディレクター 下川 沙和子(アトリエ・NOA)
取材・制作統括 美細津 由加里
(NHKエンタープライズ)
制作統括 柳沢 晋二(NHK)



演出・撮影 蜂谷 時紀(テレビマンユニオン)
構成 石井 成和 / 編集 宮島 亜紀
音効 中嶋 寿史
プロデューサー 石原 徹(テレビマンユニオン)
取材 島越 翔平(テレビマンユニオン)
演出補 鳥居 稔太(テレビマンユニオン)

ドキュメンタリー部門

支配される教室 ～ある体験授業の記録～

東京ビデオセンター、NHKエデュケーショナル / NHK BSI

受賞者コメント

ある大学教授が「差別体験授業」をしていると聞いて受講してみたら、まあ「超不快な」時間で。でも不思議。体験後の振り返り授業では受講生から言葉が溢れ出し、「差別はどうやって生まれるのか」賑やかな議論が展開する「超素敵な」授業でした。高低差ありすぎて耳キーン授業に負けない番組演出は何か、企画立案から約1年をかけ迷いながらも辿り着いた番組に奨励賞を頂けて本当に心強く思います。ありがとうございます。

ディレクター 合津 貴雄
(東京ビデオセンター)

講評

良いものを見させてもらったな、が率直な感想。企画とは「企む」もの…そんなテレビの原点を改めて教えてくれるような番組だった。開始後約10分経つまで「差別」の正体を明かさない構成も見事。授業そのものも挑戦的であるが、番組の次の展開が気になって仕方がないし、また、内海崎氏の顔や手のアップ、“扉”の撮り方も計算し尽くされている。野心的な撮影手法にもディレクターとカメラマンの「企み」を見た。タイトルも出色。

奥村 健太

ドキュメンタリー部門

NHKスペシャル ひとりぼっちの“スパイ・イルカ”

アトリエ・NOA、NHKエンタープライズ / NHK 総合

受賞者コメント

始まりはウクライナ侵攻取材時の2022年5月。ヴァルデミールの記事に出会い、気づけば夢中になって調べ、番組に提案していました。同じ地球上に棲む生き物としてヒトは他の生き物とどのように関わるべきなのか。人間同士の争いに心が囚われる中、人間のエゴが際立つこのテーマに出会えたこと、そしてヴァルデミールのことを真剣に考え向き合う仲間たちと制作できたこと、その日々、放送する機会をもらえたこと、全てに感謝します。

取材・制作統括 美細津 由加里
(NHKエンタープライズ)

講評

人間によって軍事的利用されたとされるシロイルカは人懐っこい仕草で瞬間に人気者となる。しかし獣害と見なされれば殺処分の可能性があるため、見守ろうとする保護団体と近寄る観光客のやりとりは人間の傲慢さを浮かび上げらせ、見ていて胸が痛んだ。しかし野生動物を自然に近い状態で過ごせる施設の計画を進める研究者の存在に心救われ、動物と人間の距離感や共生について考えさせられる心に残る作品となった。

煙草谷 有希子

＜サンデードキュメンタリー＞ ザ・ノンフィクション特別編『生きる歌 ～三角公園の歌姫とわたし～』

テレビマンユニオン / BSフジ

受賞者コメント

「予測不可能」ジャズシンガー坂田佳子に会うと、いつも想像から大きくハマり出してくる。波瀾万丈な生き様で、酒に吞まれると乱暴な言動が目立つが、本来の彼女は繊細で優しい心を持つ。誰かのために血を流し、誰かの代わりに涙を流す坂田佳子の歌…「生きる歌」は、まだ私の中で終わっていない。それは、「命」と向き合う覚悟を決めたから。私に勇気を与えてくれる出会いに感謝して、自分らしく納得がいくまで撮り続けたいと思う。

演出・撮影 蜂谷 時紀
(テレビマンユニオン)

講評

やっぱり無茶苦茶な人は、面白い。誰かの傷を癒したり、寄り添ったり…口当たりの良い「薬」になる番組は数あれど、「劇薬」になるほど突き抜けた人のドキュメンタリーには、昨今、なかなか出会えない気がします。主人公の歌手・坂田さんが発する剥き出しの言葉の数々は、まさに劇薬。西成という土地柄も含め、撮り切ったディレクターの熱量もハンパなかったはず。歌い手と聴き手が「生かし生かされる」ラストは、心にしみました。

深見 將史



プロデューサー 大澤 宏一郎
(太陽カンパニー)
演出プロデュース 栗原 基(日本テレビ放送網)
ディレクター 測上 航平(太陽カンパニー)
今井 貴大(太陽カンパニー)
西原 辰耶(太陽カンパニー)
日暮 太郎(太陽カンパニー)
齋藤 誠也(太陽カンパニー)



演出 嶋崎 良介(東阪企画)
ディレクター 神谷 美帆(東阪企画)
山田 瑞貴(東阪企画)
制作進行 高橋 夢花(東阪企画)
門 琴音(東阪企画)
プロデューサー 大森 蘭(東阪企画)
三門 綾子(東阪企画)
制作統括 齋藤 圭介(NHK)
佐々木 健一
(NHKエデュケーショナル)
山本 浩史(東阪企画)



制作統括 坂部 康二(NHKエンタープライズ)
伊藤 太一(AOI Pro.)、訓覇 圭(NHK)
原作 岸田 奈美(コルク)
脚本 市之瀬 浩子、鈴木 史子
音楽 高野 正樹
脚本・演出 大九 明子(狼と蛇)

情報・バラエティ部門

「歌姫ファイトクラブ!!」心技体でSINGして！

太陽カンパニー / 日本テレビ、Hulu

受賞者コメント

マスクをつけたまま歌唱審査を行う音楽オーディションに応募いただいた1457人を全て一人で審査し、最終審査の楽曲まで書き下ろして下さった広瀬香美さん。そして企画・演出として出場者全てに愛のある編集をして下さった日本テレビの栗原基さん。この2人が作り出したリアリティーショーを作品として評価いただけた事を大変嬉しく思います。初めて社員総動員で事務局運営・制作した番組が、この賞を通じて多くの視聴者に届くことを願っています。

プロデューサー 大澤 宏一郎
(太陽カンパニー)

講評

審査員は広瀬さん一人、本人マスク、歌声だけで審査。数あるオーディション番組の中でここまで「攻めた」「続きが見たい!」と思わせる企画は凄いの一言。自ら伴奏し、専門用語を躊躇なく発し、段階を踏むごとに自身も変わっていく様に主役はオーディションを受けている人達なのに、どんどん広瀬香美という人間にハマっていく見事な演出でした。

襲川 斉

情報・バラエティ部門

レギュラー番組への道 図書館名探偵の事件簿

東阪企画、NHKエデュケーショナル / NHK 総合

受賞者コメント

「失恋した時に読む本はありますか?」「魔法が使えるようになりたい」。そんな難問奇問を解決する“レファレンス”という司書の仕事に注目したのが当番組です。番組制作をしている私たちも、番組作りを通して、司書さんの本に対する情熱に感銘を受け、感化され、情熱を込めた作品でしたので、このような形で評価いただきましたことは大変光栄です。この機会にこの作品が図書館を身近に感じる契機となりますと幸いです。

プロデューサー 大森 蘭
(東阪企画)

講評

図書館って知的好奇心の森で、あらゆるジャンルのロマンが洪水となって押し寄せてくる凄い場所。テレビのネタの宝庫なのに、なぜ私は番組にしようと思わなかったのだろう?と嫉妬しました。司書さんたちの仕事は人々の好奇心や夢に寄り添う素敵な仕事という事を世に発信したことが、創り手の何よりの功績。図書館に「答えを見つけに行く」人がきっと増えたはず。テレビのハッピーな存在意義を感じさせてくれました。

堀江 昭子

プレミアムドラマ 家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった

NHKエンタープライズ、AOI Pro. / NHK BSプレミアム

受賞者コメント

「家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった」って、どういう意味なのかなあとずっと考えてきましたが、いまだにこれ!という答えは見つけられていません。でも見た人の中で、いろんな解釈が広がっていたら、なんだかちょっといい世界になっていそうな気がします。モデルとなった岸田家と、ドラマで描かれた岸本家と、見てくださったすべての人とその家族にも、幸多からんことを。ありがとうございました。

プロデューサー 坂部 康二
(NHKエンタープライズ)

講評

長いタイトルの意味をとことん味わえる家族の物語だった。関西弁での丁々発止な会話に、しんどい事は沢山起きるけど笑いを何処かしらに見つけて楽しもうという家族の強さと絆を感じた。主人公は一見縦横無尽な性格にも見えるのだけど、その中に見える信念と行動力が物語にとんでもない可笑しさや、とてつもないポジティブさを生み出していて、このキャラクターにビタッとハマっていた河合優美さんの存在感が素晴らしいかった。

木曾 貴美子

INCENTIVE AWARD



プロデューサー 中村 圭吾(日本テレビ放送網)
川邊 昭宏
(HJホールディングス)
内片 輝(内片輝事務所)
内丸 摂子(東販企画)
木下 俊(いまじん)
監督 内片 輝(内片輝事務所)
原作 綾辻 行人
脚本 八津 弘幸、早野 円、藤井 香織
音楽 富貴 晴美



原作 三浦 しをん / 脚本 蛭田 直美
音楽 Face 2 iAKE
(よしもとミュージックパブリッシング)
企画・プロデューサー 高明希(AX-ON)
プロデューサー 訓覇 圭(NHK)
岡宅 真由美(アバンスゲート)
西 紀州(AX-ON)
演出(チーフ) 塚本 進平
演出(セカンド) 麻生 学
演出(サード) 安食 大輔



プロデューサー 岡光 寛子(関西テレビ)
白石 裕菜(ホリプロ)
監督 松本 佳奈、橋山 菜由(g)、福留 武
脚本 福田 靖(CRG)
音楽P 福島 節(Ongakushitsu Inc)

ドラマ 部門 十角館の殺人

いまじん、東販企画、内片輝事務所 / Hulu

受賞者コメント

実写化不可能と言われていた綾辻先生の『十角館の殺人』。ドラマを制作するにあたり非常にプレッシャーを感じていましたが、配信後、原作ファンのみならずドラマでこの作品を知った人も共に楽しんでいる感想をSNS等で見かけ、更に著名作家の方々からも温かいコメントをいただきました。改めて日本ミステリーの奥深さとパワーを体感しました。実写化不可能に挑んだ監督、脚本家、俳優、スタッフの皆様本当にありがとうございます。

プロデューサー 木下 俊
(いまじん)

松木 創

講評

ミステリ史に燦然と輝く原作は、長い間、誰もが映像化不可能と考えてきました。なぜなら核となるのは文章でしか表現できない”叙述トリック”だからです。なので、視聴して腰を抜かしました。まさかあそこまで忠実に映像化できようとは。もうそれだけで受賞に値します。撮影中、監督は大きなプレッシャーを受け続けていたでしょうが、綿密に計算された照明とカメラアングル、そしてクソ度胸で乗り切られたことに大拍手です。

ドラマ 部門 プレミアムドラマ 舟を編む ～私、辞書つくります～

AX-ON、アバンスゲート / NHK BSプレミアム4K (BS2K同時放送)

受賞者コメント

「悪いのは言葉ではなく、使い方と選び方」。十数年前から温め続けた企画でした。SNSが広がり、コロナ禍を経て、人が繋がる上で、言葉をどう紡ぐかが問われる今だからこそ、ドラマ化する意味があったと感じます。視点と時代を置き換える為、綿密な取材を行う中で、原作により深く触れられ、血の通った脚本ができ、スタッフ・キャストが丁寧に誠実に臨みました。我々の血潮を受け止めて下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

企画・プロデューサー 高明希
(AX-ON)

唯野 友歩

講評

辞書をつくる。人類の営みを言葉にして文化として認める。文化を認めることは、文化をつくることと等しいのかもしれない。それだけの責任感をもって「辞書づくり＝仕事」に挑むひとびとの小さくも大きな葛藤。私たちが日頃から使う「言葉」と「ものづくり」に誠実に向き合う姿はエンターテインメントで感動的だ。軽妙でユーモラスな世界観を演出された手腕は見事で、優しさに包まれる視聴体験だった。

ドラマ 部門 春になったら

ホリプロ / 関西テレビ放送

受賞者コメント

このドラマは関西テレビ岡光Pと共に企画したオリジナルのホームドラマです。オリジナル作品を、信頼できるセンスと熱意をもった各部のスタッフと共に、遊び心たっぷりな愛しい俳優部と共に、制作過程も作品そのものも豊かに作れたことが誇りです。そしてそんなドラマを評価いただけたことを大変嬉しく思います。「春になったら」チームみんなで、奨励賞の受賞を励みに、今後も面白いものを作り届けたいと思います。

プロデューサー 白石 裕菜
(ホリプロ)

木曾 貴美子

講評

この世界が優しく毎話ジンと来た。奈緒さんと木梨さんは本物の親子の様に馴染んでいたし、「いつもの景色の幸せ」を映像や音楽できちんと視聴者に届けようとするキャストとスタッフの一心となった思いを感じた。ラストに父親が亡くなるシーンは描かず突然いなくなって進むのだが、これまでの毎日の積み重ねを大事に描いて来た事により、より“生”を重く感じる事が出来て、この番組が描いてきた事が詰まっていたように感じた。

ATP賞 40周年記念受賞式

AWARD CEREMONY SCENE



総務副大臣の馬場成志様にご祝辞をいただきました。



NHK専務理事・メディア総局長の山名啓雄様にご祝辞をいただきました。



民放連会長の遠藤龍之介様にご祝辞をいただきました。



韓国・釜山国際映画祭 アジアコンテツ&フィルムマーケット委員長のEllen Kim様に日本語でご祝辞をいただきました。



ATP福浦与一理事長の主催者挨拶。いよいよ開幕です！



今年の司会は、合原明子アナ(NHK)と杉山真也アナ(TBS)。



最優秀賞「金曜ドラマ」不適切にもほどがある!から、脚本家の宮藤官九郎さんにご登壇いただきました。



特別賞には、タレント、司会者、歌手の堺正章さんが受賞され、ご登壇いただきました！



同じく特別賞に選ばれた「花嫁のれん」制作チームからは、主演の羽田美智子さんにご登壇いただきました！



最優秀新人賞 & 優秀新人賞

BEST NEWCOMER AWARD



演出 富田 玲央 (パオネットワーク)



レギュラー番組への道 危険なささやき

NHK 総合

出演 田畑 智子(フロム・ファーストプロダクション)、西田 公昭(立正大学)
語り 横 大輔(シグマ・セブン) / 演出 富田 玲央(パオネットワーク)
脚本 藤平 久子(s a c c a) / 編集 渡邊 颯次(白川プロ)
撮影 井手口 大騎(ダグラス(いちまるよん)) / 録音 森 英司
照明 白鳥 友輔 / 制作進行 川添 ビイラル / 音響効果 長澤 紀宏(創音)
制作統括 松本 裕子(パオネットワーク)、齋藤 圭介(NHK)
佐々木健一(NHKエデュケーショナル)

受賞者コメント

この度は最優秀新人賞をいただき、誠にありがとうございます。この番組はテーマの難しさのみならず、ドラマ的な演出も必要などでも挑戦の多いものでしたが、様々な形でサポートしていただきながら無事形にすることができました。「自分は大丈夫」と思っていることは、誰にでもありえることだと思います。そんな心理状態を描く舞台劇をリアリティあるものにできたのは、技術スタッ

講評

制作者ならば誰も「撮りたいのに撮れない」壁にぶちあたった経験があるはず。そこで諦めずに模索を続けた時にこそ、唯一無二の演出が生まれるのだろう。仄暗いスタジオ、実力派俳優の名演と綿密な取材がありなす不気味なリアリティ。“もし勧誘されたのが自分だったら…”とゾッとした時にはもう、視聴者は番組の本質に至っている。このスタイルを応用すれば、今まで踏み込み辛かった様々なテーマにも迫れるのではないだろうか。

柳田 香帆



優秀新人賞

EXCELLENCE NEWCOMER AWARD



ディレクター 岩元 晴香(メディア・メトル)
構成 田代 裕(FOR田代裕事務所)
撮影 加藤 実智雄、浜崎 務(映像グループ 翔の会)、戸田 統
編集 新谷 拓治
プロデューサー 沖 倫太郎(毎日放送)、
澤田 賢一(メディア・メトル)

ディレクター

岩元 晴香 (メディア・メトル)

情熱大陸 機能神経外科医 山本一徹

毎日放送

受賞者コメント

この度は輝かしい賞を頂き大変光栄に思います。山本先生や患者様をはじめ、制作に携わってくださった全ての方に感謝申し上げます。機能的疾患の多くは原因不明で治療法も認知されていません。そんな状況を変え、困ってい

る患者を「片っ端から治療したい」と熱く語っていた山本先生の姿は忘れられません。誰かの幸せを本気で願い、叶えられる人は本当にすごい！今後も、そんな人にスポットライトを当てた番組が作れたら嬉しいです。

講評

治療前後の患者の変化が明白で、手術中に患者がギターを弾く映像は衝撃的だった。センシティブな内容ながら1歩踏み込んだところまで取材されており、山本医師や患者がディレクターを信用しているからこそ撮れた映像だと感じた。難しい手術内容の

説明も分かりやすい。「より多くの人にこの治療法を知ってもらいたい」と考える山本医師を見つけ、熱量を持って企画立案された番組。テレビを制作する意味を改めて考えさせられた。

中川 奈緒



ディレクター 任 ソリプ(テムジン)
撮影 門脇 妙子 / 編集 伊藤 了太(ギトリ)
音響効果 越前屋 修(エヌ・エス・エル)
制作統括 吉沢 朗(NHK)
芦立 宏(NHKグローバルメディアサービス)
鐘川 崇仁(テムジン)

ディレクター

任 ソリプ (テムジン)

Asia Insight ネパール 海外出稼ぎ大国の現実

NHK BSI

受賞者コメント

自分の人生で一番つらかった経験を率直に話してくださった皆さんのお陰で、このような賞をいただきました。人々の人生の痛みを物語にした作品で賞をいただき、ただ嬉しく思うだけで良いのかという複雑な感情もありま

すが、番組をきっかけにネパールの現状を知り、犠牲になった労働者たちを覚えてくれる方が一人でも増えたらいいと思います。また、制作を支えてくれた方々にも心から感謝いたします。ありがとうございました。

講評

ネパール国内の問題に直接フォーカスすることがまず思いつく演出になると考えたが、国内の事ではなく出稼ぎ先での出来事や施設の環境等で大変な思いをしている人々取材することによって、「そんな大変な出稼ぎをしなくてはならない国である」という間接的な

構成が直接的に伝わるよりもネパールの問題をよりダイレクトに視聴者に痛感させることができており、難しい内容でありながらも伝わりやすい構成になっていたと思います。

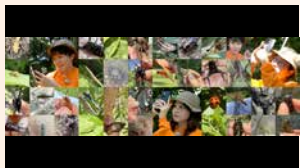
野中 翔太

奨励新人賞

ENCOURAGEMENT NEWCOMER AWARD



演出 神野 美歩子 (ドキュメンタリージャパン)
プロデューサー 柚口 三奈子 (ドキュメンタリージャパン)
制作統括 河内 博之 (NHK)
鈴木 真美 (NHKエンタープライズ)
鐘川 宗仁 (テムジン)



ディレクター 植木 健太 (NHKエデュケーショナル)
藤井 智康 (ザ・ワークス)
プロデューサー 玉井 佑実 (ザ・ワークス)
制作統括 北村 卓也 (NHKエデュケーショナル)
佐藤 克利 (NHK)



ディレクター 浦野 直己 (mK5)
プロデューサー 光原 朋秀 (mK5)
制作統括 村山 淳 (NHKエデュケーショナル)
奥野 龍太郎 (NHK)
技術 花田 健 (NHK)
CG制作 高嶋 一成 (アフタイムズ)
編集 大生 哲司 (TBSスパークル)
音響効果 徳永 輪 (PACO)

演出

神野 美歩子 (ドキュメンタリージャパン)

いいいじゅー!! 北海道 上士幌 助産師

NHK 総合

受賞者コメント

産声が聞こえた瞬間から始まる育児。産後の疲れ切った身体で、気を抜けば簡単に死んでしまうか弱い命が、24時間すぐ横にいる、その緊張感ばかり知れません。そんな時、「大丈夫、よくやってるよ」と言ってくれる助産師が側にいれば、どんなに救われるでしょうか。実際、母親たちにとって、取材した助産師の方の存在の大きさを目の当たりにしました。産後、温かなケアを届ける存在が、この社会でもっと光が当たることを願います。

講評

心を開いてくれないと立ち入りにくい空間で、渡辺さんがケアしている姿をしっかりと撮影できている取材力に脱帽。ディレクターの存在をいい意味で消せているから、助産院に通うお母さんたちが悩みを吐き出している気がした。また、渡辺さんが教える立場でありながら、お母さんたちと同じ目線で考える優しさも描けている。きっと助産院に来る人たちの悩みは尽きないだろう。続きが見たいし、男女ともに見てほしいと思う番組だった。

中川 奈緒

ディレクター

植木 健太 (NHKエデュケーショナル)

スマホで昆虫ズカーン!

NHK BS4K・NHK Eテレ (同時放送)

受賞者コメント

昆虫の番組でしたが、私自身は今まで虫と触れ合う機会はそうありませんでした。「撮影」ならそんな人も楽しめるかもという素朴な案を、出演もした中学生の泰成さんが試してみて、取材時に嬉しそうに写真を見せてくださったことで企画のおもしろさが実感されました。実感が伴うと交渉や取材時にも企画内容に自信が持て、スムーズにいった場面もありました。今後もおもしろさや意義を実感しながら番組制作と向き合えるよう励みます。

講評

「現代の虫撮(と)り」というフレーズが秀逸。”自然系の教育番組は大人が子供に知識を与えるもの”という先入観を壊し、大人も子どももスタジオもナレーターも、出演者全員が童心に帰ってはしゃいでいたのが新鮮だった。デザインや選曲など細部にも遊び心が溢れ、ディレクター自身も楽しんで制作したことが窺える。そういえば自分も幼い頃、草むらという未知の世界に胸を躍らせていた。あのワクワクを再び感じる日が来るとは。

柳田 香帆

ディレクター

浦野 直己 (mK5)

謎解き! ヒミツの至宝さん 驚きずくめの国宝 舟橋蒔絵硯箱

NHK BS8K

受賞者コメント

400年前の国宝を3DCGで鑑賞する意義は何なのだろう?そう自分に問いかけるところから出発したのがこの番組です。国宝を360度、自由自在に鑑賞できるならと、とにかくとことん作品のディテールと向き合うことに決め、そのなかで見えてきた作品の魅力を丁寧に表現していけるよう努力しました。そういった部分が少しでもお伝えできていればとても嬉しいです。そして、番組に力を貸して下さいました。方々に、心より感謝致します。

講評

不思議が詰まった国宝の箱…見る人が見れば凄いかもかもしれないが視聴者にとってはただの箱。この難題をCGを駆使しつつ遊び心のあるナレーションなどの演出も用いて、興味が無い人でも見ているうちにグッと引き込まれて知的好奇心をくすぐられるエンタメになっており、「普通に生活していたら素通りしていたかもしれないモノをテレビを通じて興味を持ってもらう」というテレビの良さを再認識するようない番組だと思いました。

野中 翔太



脚本 今井 太郎 / 音楽 T字路s
プロデューサー 長田 宙 (日本テレビ放送網)
阿利 極 (AX-ON)
演出 狩山 俊輔 (日本テレビ放送網)
伊藤 彰彰 (AX-ON)、長沼 誠 (AX-ON)



プロデューサー 田川 友紀 (テレコムスタッフ)
ディレクター 中島 璃音 (テレコムスタッフ)
カメラマン 門脇 妙子
編集 山本 聡

プロデューサー

阿利 極 (AX-ON)

日曜ドラマ だが、情熱はある

日本テレビ

受賞者コメント

制作の仕事を続けていると楽しいことばかりではなく、大変なこともあります。その中でここまで続けてこられたのは「だが、情熱はある」。その言葉に尽きると思います。このドラマで賞を頂けたことを嬉しく思うと共に、身の引き締まる思いです。素晴らしいキャスト、スタッフの皆様と情熱のある作品作りができた事を誇りに思い、感謝の気持ちで一杯です。これからも日々精進していきたいと思います。誠にありがとうございます。

講評

泣きました。若林さんと山里さんが憑依したかのような高橋さんと森本さんの姿に心が持っていけませんでした。リアリティの追及も凄まじく、M-Iグラブリの再現性は圧巻で、演じてる高橋さん森本さんが自分たちに対面するのはこの作品だからこそとても面白いシーンでした。このクオリティに仕上げるには、相当な準備を要したと思います。時間に追われがちな連ドラ制作ですが、作品としてあるべき制作体制の姿を見せつけられました。

石田 麻衣

ディレクター

中島 璃音 (テレコムスタッフ)

第182回 BS「ミニドキュメンタリー」それは偶然ひっついてきた乳房

NHK BS

受賞者コメント

ノンバイナリーである山内さんの乳腺摘出手術のドキュメントは、「必要としている人は多いのに、今まで存在しなかったもの」だと思い、企画を書きました。トランスヘイトへの怒り、クィアへの連帯の気持ちが制作の原動力でした。入社1年目、初ディレクターで困難も多々あった本作で賞をいただけたことがとても感慨深いです。山内さん、パートナーの清水さんはじめ、制作に携わっていただいた皆様に心より感謝申し上げます。

講評

人生の岐路となる大切な瞬間に立ち会えたのは、中島さんがディレクターであったからこそ感じられる作品。乳腺摘出手術後のとても晴れやかな取材対象者の姿が印象的で、短絡的に社会的弱者として描かない、という方針を貫いたからこそ撮れた画だと思います。今回と同様に、中島さんにしか届けられないストーリーがあると思いますので、これからも私たちに気づきを与えてくれる作品を送り出してくれると期待しています。

石田 麻衣



特別賞

SPECIAL PRIZE

堺 正章

(タレント、司会者、歌手)



堺正章氏にご登壇いただきました

受賞者コメント

この度はATP皆様のお陰を持ちまして、特別賞を受賞することが出来ました。大変名誉な事と思っております。頂ける物はなんでも頂く主義の男で御座います。60年を超える芸能生活が続いておりますが、振り返ってみますればテレビに育てて頂いた60年で御座いました。このところはスピードも速くなりネットの影響もあり混沌とした時代になってまいりました。皆様にはテレビの妻さをもっと世に知らしめていただきたいです。私も微力ながら踏ん張る所存でございます。誠にありがとうございます。

堺 正章

推薦理由

歌手、俳優、司会者と全ての番組の第一線で活躍され、その類まれな才能とコメディセンスで愛され、芸能生活62年を迎えられました。長年製作者と共に歩んで頂き、番組に寄与された多大な功績に対して特別賞を贈ります。

受賞者コメント

この度はATP賞特別賞を頂きましてありがとうございます。ナレーター TARAKOとして受賞いただいた事、ひとえに作品の制作に携わった皆様のおかげだと存じます。作品を通して育てて頂いた皆様に改めて心よりお礼を申し上げます。現場では、作品を通して感じた気持ちをそのまま言葉に乗せる事、そして、楽しむ事を大切にマイクに向かっておりました。作品に寄り添い伝える彼女の姿勢を後進へと伝え、繋いでいきたいと存じます。

野端 一史(トルバドール音楽事務所)

推薦理由

ちびまる子ちゃんの声として親しまれる一方、ナレーターとして多くの番組で活躍されました。最後まで収録に挑み続け、いつも私たち製作者の同志としてMAルームと一緒に闘ってくれた真摯な姿勢に敬意を表し特別賞を贈ります。

受賞者コメント

通算12年間にわたる理事在任中、製作会社の著作権獲得、ATP賞審査委員、新人育成セミナー、若手映画プロジェクト等担当させて頂きました。製作に携わる多くの方々や作品との出会いは大変刺激になっておりました。製作者として1999年「大新宿ノラ猫物語」のATP賞グランプリと郵政大臣賞のダブル受賞はその後の励みとなりました。信念をもって真摯に誠実に作品を創り続けた人生でした。最期に名誉ある賞を賜り心から感謝申し上げます。

山口 秀矢夫人 山口 周子

推薦理由

1990年制作会社「えふぶんの壱」を設立。自ら多くの番組や映画を製作するかたわら通算12年間にわたりATP理事として尽力いただきました。中でも若手クリエイター育成を目的とした「ATP若手映画プロジェクト」を立ち上げました。これらの多大な功績に対して特別賞を贈ります。



山口周子夫人にご登壇いただきました

山口 秀矢

(元えふぶんの壱取締役会長、プロデューサー)



「新しいカギ」制作チーム



フジテレビジョン演出の田中良樹さんにご挨拶いただきました



受賞者コメント

「最近のテレビって面白くないよな」Z世代の合言葉のように言われて数年。しかしながら、「学校かくれんぼ」が今では全国約5万人から応募が来るまでの企画になり、まだまだテレビは面白い！と思ってもらえている事を実感しています。ロケ後には必ず生徒達が喜んでくれ、コロナ禍で沈んでいた学校生活にも活気が戻ってきており、今後も生徒達と番組を盛り上げていきたいと思います。この度は「特別賞」を頂きありがとうございました！

プロデューサー 馬場 哉(メディアブル)

推薦理由

「学校かくれんぼ」のヒットを鉾脈に、若者とテレビが本気で遊ぶコンテンツを次々と展開。何かと窮屈になりがちな令和の時代に、テレビ本来の力を再確認させてくれました。その本気の汗とクリエイティビティに敬意を表し特別賞を贈ります。

「花嫁のれん」制作チーム



主演の羽田美智子さんにもご登壇いただきました



受賞者コメント

記念すべき第40回ATP賞特別賞に選んでいただき誠にありがとうございます。このような名誉に与れるとは夢にも思いませんでした。シリーズ初回を制作したのはいまだから14年前。2015年までに計4シリーズを制作しましたが、その後の約30ヶ国に及ぶ海外展開は、日本のコンテンツを世界にアピールする礎になれたのではないかと自負しております。共に歩んでくれた東海テレビの皆さまはじめ、すべてのキャスト・スタッフに感謝申し上げます。

プロデューサー 沼田 通嗣(テレバック)

推薦理由

普遍的テーマである「嫁姑の関係」を金沢の老舗旅館を舞台に描き、英語やスペイン語字幕により約30の国と地域で放送・配信。和食や着物など日本文化の発信にも寄与した作品です。これらの海外展開の功績に対して特別賞を贈ります。

「ヒロシのぼっちキャンプ」制作チーム



テレコムスタッフ演出プロデューサーの伊藤正憲さんにご挨拶いただきました



受賞者コメント

自然のなかに独りぼっちの身を置いて自らを癒し、自分のなかの「好き」という感覚を信じて人生を歩み続けている。そんなヒロシさんの自立した格好良さを伝えたいと企画を書いたのが2017年のことでした。おかげさまで多くの皆様に応援される番組に育てて頂き、2023年度Tverでの総再生数は182万回を記録しました(ビデオリサーチにて算出)。これからも自由なヒロシさんの姿と自然の癒しを届けられたらと思います。

演出プロデューサー 伊藤 正憲
(テレコムスタッフ)

推薦理由

“本物の野遊びの技術”を備えた芸人ヒロシさんという唯一無二のキャラクターを活かし、キャンプという自然体験の素晴らしさを発信。放送と配信の両面で広く支持を集めるその目覚ましい功績に対して特別賞を贈ります。

総務大臣賞

MINISTER OF INTERNAL AFFAIRS AND
COMMUNICATIONS AWARD

鷹を継ぐもの

テムジン、NHKエデュケーショナル /
NHK BSプレミアム、NHK BS4Kディレクター 高倉 天地(テムジン) / プロデューサー 鐘川 崇仁(テムジン)
制作統括 齊藤 倫雄(NHKエデュケーショナル)、寺岡 環(NHK)
取材 堀口 裕生(テムジン) / 音響効果 四元 慧也(mixtape)

受賞者コメント

100年先でも見てもらえる番組を作りたい。そんな目標を抱いていた矢先、鷹匠、松原英俊さんに会いました。「自然の中で鷹と生きたい」。たった一つの夢を半世紀も追い続けてきた孤高の鷹匠が、初めて弟子をとるかもしれない。その歴史的瞬間を夢中で撮影しました。弟子の宗萌美さんは高校を卒業後、松原氏と同居しながら、本格的に修業を始めています。二人の行く末を見届けるため、私はこれからも取材を続けていきます！

ディレクター 高倉 天地(テムジン)

講評

番組は「消えゆく伝統の継承」という社会的テーマと共に、インパクトある映像で「命の尊さ」という深いテーマも考えさせます。知られざる日本の現場を描きながら、普遍的なテーマを感じさせる本番組は、「作品性」「テーマ性」を大切に海外の放送局や映画祭への展開が期待できるでしょう。主人公2人をどんな未来が待っているのか、興味は尽きません。今後も追い続けるならば、国際共同制作の可能性も探って欲しい作品です。

浜野 高宏

総務大臣賞 ノミネート作品

● ドキュメンタリー部門 ●

鷹を継ぐもの テムジン、NHKエデュケーショナル/NHK BSプレミアム、NHK BS4K

プロフェッショナル 仕事の流儀 宮崎駿スペシャル
ジブリと宮崎駿の2399日 映画はこうして生まれた

NHKエンタープライズ/NHK 総合

夢のあとさき 日本遺構見聞録

、、 Film & Media、NHKエデュケーショナル/NHK BSプレミアム、NHK BS4K

● 情報・バラエティ部門 ●

サンバリュ 世界¥コノ映像いくらデスカ? AX-ON/日本テレビ

超体感! 四国 お遍路の旅 放送映画製作所、NHKエンタープライズ/NHK 総合

● ドラマ部門 ●

金曜ドラマ 不適切にもほどがある! TBSスパークル/TBS

土曜ドラマ デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士 KADOKAWA、NHKエンタープライズ/NHK 総合

真夜中ドラマ ドラマ 地球の歩き方 テレコムスタッフ/テレビ大阪、BSテレ東

講評

COMMENTARY

総評 COMPREHENSIVE EVALUATION

制作者の“覚悟”際立つ
最優秀賞3作品審査委員長
松葉 直彦

第40回を迎えた今回は、創り手が選ぶ…というATP賞の初心を大切に、「制作者として嫉妬するものを」との審査方針を掲げ、審査に当たりました。

ここ数年、ウクライナ紛争、LGBTQ、コロナ禍など、テーマが一局集中しがちだったドキュメンタリー部門は、彩り豊かなテーマや世界観が並び、今年も秀作揃いだったドラマ部門とともに見ごたえ十分。「どの一作を最優秀に?」については複数の候補で議論百出だった。特筆すべきは情報・バラエティ部門。ここ数年で最も企画力・演出力が光る作品が揃った。審査員の評価も多岐にわたり、難しい審査となったが、“企画開発こそ制作者の命”と改めて感じさせてくれた。結果、最優秀賞となった3作はどれも、制作者の“覚悟”が際立っていたように感じた。この先に物語はあるのか? 一点突破で視聴者に届くのか? 今の時代に大丈夫か? 制作中にあったであろうさまざまな葛藤の中、「炎上上等!」「失敗上等!」との強い覚悟が感じられ、まさに“嫉妬”の一語だった。

応募総数は新人賞も合わせ168作。総尺200時間に及ぶ作品群には、テレビの、映像コンテンツのさらなる可能性を感じざるを得ませんでした。すべての応募作、制作者の皆さまに改めて感謝申し上げます。

● ドキュメンタリー部門 ●

時代を
真摯に見つめる
「トンボの眼」

コロナ禍もようやく収束し、応募作が例年どおりバラエティに富んできた印象のある2023年。エントリー番組57本は、どれも「トンボの眼」のように様々な角度から、時代を真摯に見つめていた。最優秀賞の「新 爆走風塵」は一带一路と中国の「今」を、珠玉の人間ドラマと共に。優秀賞の「キム・ジヤン」は飽きることのない人間の欲を。「草刈正雄」はテレビでしか成し得ない、手間と労力の結晶を。奨励賞の「生きる歌」は、なかなか見られない稀有なヒトの生き様を…。どれもこれも審査員一同、製作者として「やられた！悔しい！」と思わせるのに十分なもののばかりであった。先輩から後輩へ、そして未来の「創り手（視聴者）」に。ドキュメンタリー番組の“遺伝子”が脈々と受け継がれていっていることに喜びを感じた。最後に…どの番組も「企み」が随所に見られた力作揃いだったため、審査委員会は予定時間を大幅に超え、白熱した議論が展開されたことを付け加えておく。

審査委員 奥村 健太

● 情報・バラエティ部門 ●

グローバル
マーケットを
次の目標に

プラットフォームがテレビだけでなく、自由度や柔軟性が高まっている今、バラエティ番組にこそ色んな可能性があるのかも知れない…。そう考えた一方で「これは何がやりたかったの？」と疑問に思ってしまうものや、「出演者のファンしか楽しめないのでは？」と感じる企画もわずかなが見受けられました。（語気が強くてすみません！）どれもが一生懸命に創った番組なのは間違いなく、みんな新しいモノを模索しているのも確かで「テレビの希望」をたくさん感じさせて頂きました。けれども今の韓国のように他国にリメイクされるぐらいの斬新な番組を生みださなければ我々は「オワコン」と言われ続けてしまうのかも？と自戒をこめて痛感。予算や人材不足との闘いもありますが、みんなでグローバルマーケットを目指していきたいと感じた、記念すべき第40回でした。

審査委員 堀江 昭子

● ドラマ部門 ●

視聴者を
信頼する挑戦が
作品のクオリティを
高める

最優秀賞・優秀賞の3作は頭一つ抜けていたので、優秀賞2作、奨励賞4作となりました。受賞作に共通する点は、“視聴者を信頼する姿勢”だと感じました。過度に分かり易くしない、社会問題に勇気をもってコミットする、芸術性を大切にする、という見る人を信頼しなければならない挑戦が作品のクオリティを高めたと思います。もちろん、エンタテインメントに特化した作品にも頑張っ

審査委員 松木 創

テレビの公共性
これからも大事に新人賞審査委員長
山本 妙

今年は応募が20本と少なく、一つ一つ丁寧に審査できたように思います。審査にあたり大事にした点は、「公共性」と「若者らしい尖り」です。玉石混交の動画が溢れる中、テレビの発信する情報の公共性は、私たちが70年かけて築き上げてきた宝です。テレビの未来を担う若手に、これからも大事にしてほしいポイントです。「尖り」は、時代を先取りしたテーマを深く取材し、不器用でも、斬新な切り口や演出法で描いていることです。経験が少ないからこそ、何

事にも囚われず、新しいことにチャレンジできた一。与えられたテーマに果敢にチャレンジし、先輩たちの作ったものに見劣りのしない回に仕上げた一。そんな新人さんたちのキラリ光る瞬間をたくさん見せて頂きました。特に優秀賞の3本は、その独自性や取材の深さ、構成力が抜群で、満場一致で選出致しました。受賞された方には、この受賞を励みに、これからもテレビ業界を盛り上げてほしいと切に願います。おめでとうございました。

総務大臣賞総評

MINISTER OF INTERNAL AFFAIRS AND
COMMUNICATIONS AWARD REVIEW国際共同制作の
可能性も秘める作品総務大臣賞審査委員長
浜野 高広

海外展開に適した作品を選ぶ審査は大変困難でした。放送局への販売、世界のストーリーミングサービスでの配信、映画祭やテレビ祭への出品など、数多くの可能性があります。どの作品を選ぶべきか、委員の間で多様な意見が交わされました。

『鷹を継ぐもの』は、秋田の山奥で鷹と暮らす鷹匠を、高校卒業間近の女性が訪ねるところから始まります。挑戦を恐れない彼女の姿を見た師匠は、先代から受け継いだ技を彼女に伝えることを決意

します。美しい雪山で鷹を訓練する二人の姿は、「消えゆく伝統の継承」という社会的なテーマと共に、「命の尊さ」という深いテーマを鮮やかに描き出します。作品性とテーマ性を重視する海外の放送局や映画祭が大いに興味を持つでしょう。環境が変化する中で、二人をどのような困難が待ち受けているのか、その行方に興味は尽きません。この作品は国際共同制作の可能性も秘めています。今後の展開に大いに期待しています。



ATPでは、ATP賞受賞式40周年を記念して、
「若手クリエイターズフォーラム」を開催いたしました。
会場には80名を超える会員社や大学生が参加し、
『Jコンテンツの近未来～自分を突き動かすもの』を
テーマに登壇したドキュメンタリー、バラエティ、ドラマで活躍している
若手クリエイターたちがパネルディスカッションを行いました。
終了後には懇親会も開催されました。

主催 一般社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟 / 助成 公益財団法人 放送文化基金

ATP賞40周年記念フォーラム

若手クリエイターズフォーラム 『Jコンテンツの近未来 ～自分を突き動かすもの』

登壇者紹介 (写真右から順に)

TBSスパークル

天宮 沙恵子 様
AMAMIYA SAEKO

1996年生まれ。2018年にTBSスパークルに入社。「中学聖日記」「私の家政夫ナギサさん」「わたしの幸せな結婚」等で助監督を担当。その後APを経て、「不適切にもほどがある!」にて、プロデューサーデビュー。来年冬には、自身初となるオリジナル企画にてチーフプロデューサーを担当予定。

日テレ アクスオン

野中 翔太 様
NONAKA SHOTA

2011年 日テレ アクスオン入社。バラエティ番組を制作する傍ら、オリジナル企画をこれまで6本制作。「音が出たら負け」("Mute it!")は国内外で評価され、「ContentAsia Awards 2020」のテレビフォーマット(バラエティ)部門最優秀賞を受賞。現在も、地上波のほか海外フォーマット企画開発、企画立案を行う。

NHKエンタープライズ

丸山 梓 様
MARUYAMA AZUSA

2014年入社。日本語・英語で番組制作・ニュース取材を行う。国内の移民問題や雲仙普賢岳災害の被災者などを取材した後、海外からのドキュメンタリー購入業務を経て、2020年より番組制作に従事。NHK「ワールド向けの取材やノンフィクションの番組開発を行う。『ようこそ認知症世界へ』『ウィッシュツリー』など。2024年「ミラドル 絶景を聴く」でフランス Sunny Side of the Doc セレクション選出。

テムジン

柳田 香帆 様
YANAGIDA KAHO

1991年生まれ。武蔵大学にて番組制作を専攻。2014年株式会社テムジン入社。伝統工芸、多文化共生、地方移住など日本各地を舞台にしたドキュメンタリーを中心に制作。NHK「いいいじゅー!!」をはじめレギュラー番組の立ち上げも担当。NHK「渡辺直美のナオミーツ」第57回ギャラクシー賞奨励賞共同受賞。

司 会



アナウンサー

辻 よしなり 様
TSUJI YOSHINARI

1961年埼玉生まれ。慶應大学卒業後テレビ朝日に入社。テレビ朝日時代はプロレスの実況アナウンサーとして人気を博し、2000年に退社・独立。現在はフリーランスとして、バラエティ番組・スポーツ実況・イベント司会・講演・執筆などで幅広く活躍。

～自分の現在地～

柳田

—— 制作番組『いいいじゅー!!』は、ドキュメンタリーのイメージとはちょっと違った印象があります。

柳田 弊社はとても硬派なドキュメンタリー番組が多い会社なんですけど、私はちょっとバラエティっぽいものも好きだったり、YouTubeとかも全然好きですし、ちょっと軽いテイストのドキュメンタリーものを作るディレクターとして社内の位置づけがあったんです。2020年の最初の緊急事態宣言のころに、弊社のプロデューサーが新聞を見ていて、最近東京から離れる人が多いらしいという話があって。面白いねこれを番組にしてみようと言って弊社のプロデューサーが移住の企画をNHKに提出しました。プロデューサーからは、若い方にも見られる番組にしてほしいということと、地方の情報を取り上げてシリーズになるようなレギュラーを目指してほしいという課題をいただきました。制作は本当にチームの皆さんがディレクターである私の意向を尊重してくださり、イラスト、タイトル、音楽の原案もやらせていただいた貴重な番組でした。堅苦し

いものでなく肩肘張らずに観始めて、観終わったときには深いテーマに気づく番組づくりを現場でやってきた経験が活きたと思います。

—— 大学をメディア社会学科にしたきっかけはなんでしょうか。

映像をやりたいという思いは高校生ぐらいのときからありました。私が高校生の頃に宇多田ヒカルさんのミュージックビデオなどが流行ったりしていて夢中で見ていたので、アートや映像制作をやりたいってところから大学を絞りました。アートや映像が人を引きつける力を生かして、アートに詳しい玄人だけに届くものではなくて、より社会に還元できる映像を探した中でテレビ番組に行きつきました。その中でドラマとかCMとかいろいろ授業で作ったんですけど、ドキュメンタリーに落ち着いたっていう感じです。

野中

—— 過去にキックボクサーや芸人や放送作家をやった野中さん。今どんな経験がどんなふうになかまされてる感じられますか。

野中 芸人さんの中には、気持ちわからずに面白くないなってコメントする人の話は聞きたくないっていう方もいるらしいのですが、板の上に立って

滑った経験がある自分の話だったらちょっと聞いてくれたり、野中ならいいよって言ってくれたりとか。それは芸人などを経験したからこそプラスかなとは思いますが。賞レースで1回戦で敗退してるんで、こんなに滑るかってぐらい滑って。よく滑ったらエアコンの音が聞こえるとか言うじゃないですか。僕の場合は室外機の音まで聞こえてきて。(笑)

—— 「音が出たら負け」の番組は、どのように生まれたのですか。

放送事故みたいなことを起こして局員をあとと言わせようぜみたいな雰囲気から、テレビから音を削って番組になりました。僕が業界に入って思ったのは、足し算の歴史というか、SEがつきます、テロップがつきますとなっていたので、だから逆に引こうと思った。

—— この番組は世界展開も果たしましたね。

日本の場合、例えばグルメも自分の家の近くとかなるべく身近なものを紹介する感じだと思うのですが、そうすると世界で売れないじゃないですか。言葉も使わない番組であったからこそ、日本人が何かやってるわってなって、欧米の方が興味を持ってくれた。

丸山

—— 認知症というテーマは様々な番組で取り上げられていますが、『ようこそ認知症世界へ』はテイストが違いますね。

丸山 認知症の話っていうのは本屋さんとか、テレビとかで結構取り扱われることが多いですが、認知症の当事者の声というよりは、ご家族の話やお医者さんの解説っていうものがすごく多い。「あれ、認知症の当事者の方がどう体験してどう感じて、何に困ってるのか、あるいは趣味は何かとか、そういうことに耳を傾けてきてなかったんじゃないかな」というふうに思っ

て番組を作りました。あとは、認知症イコール「怖い」とか「つらい」とか、そういうイメージにすごい繋がって行って、知ることさえメンタル的にストレスがかかるようなもの

に思えてしまう。そうすると、それが認知症を知ることを遠ざけてしまう。多くの人が認知症のことを“気軽に”知ってみようって思えるような形に

して、アニメも使いました。—— クリエイターになる以前はパフォーマーだったと伺いました。

アメリカのNPOに入って、10カ国でダンスや歌、生演奏をしていました。メンバーが20カ国から集っていたので、食も気も合わなければ宗教も合わない人もいました。でも、そういう人たちとも時間をともにして腹を割って話すと、わかり合える部分もあるんだな

っていうところが、取材をするのと

ちょっと似てるのかなって思ったところもあって。テレビ業界に興味があるかもって思ったきっかけにはなったなと思います。

天宮

—— 今年度のドラマ部門最優秀賞受賞、改めておめでとうございます。

天宮 ありがとうございます。『不適切にもほどがある!』は放送当時からすごく好評いただいていたんですけども、一方で結構コンプライアンスとかハラスメントとかそういう話題に切り込んでいた番組だったので、そういうセンシティブな話題をコメディの組上に上げること自体結構否定的な意見を持ってる方も多くいらっしゃいました。改めてこういうATP賞を受賞させていただいて、何か少なくともそういうことを皆さんが議論する土台みたいなことを、我々がこの作品を通じて作ることができたってことを評価していただいたのかなっていう気持ちで

すごく嬉しく思います。元々のテーマとしては昭和を描くだったので、若い世代はクリエイターとして現場にいる必然性はなかったと思います。でも結果的に昭和と令和っていうこの二つの時代をかけるおっさんの話にしようという話に広がったので、ギリギリ私はZ世代なので、令和の視点を持つクリエイターということ

で参加させていただけることになりました。

—— 天宮さんはどうしてこの世界に入ったのですか。

天宮 元々映像世界は興味がり、中学、高校で放送部に入っていました。お昼のアナウンスをするイメージがあると思うのですが、その中で私はドキュメンタリーとか、何か創作ドラマみたいなその頃から作っていました。映像制作活動が面白かったのと、元々ドラマが好きだったので、何か映像を通して何かを人に伝える仕事をしたいなって中学から思っていました。私はTBS系に勤めてらっしゃる方の作品がすごい好きだったので、そういう就職活動はしてました。

クリエイターとしての**テレビ****今と未来**

—— 今のテレビに思うことはありますか。

柳田 就活の面接で「今はテレビ以外のコンテンツがいっぱい増えてるのに、どうしてテレビを志望するのか？」って聞かれたんですよ。すごくニッチな情報、例えば「ある種類のメダカの飼い方」とかはテレビでは流せないと思うんですね、視聴者がそんなにいないから。でも、今こんな社会問題があるよとか、みんな知らないと思うけどこんなことがあるよっていうのは多分、大きなメディアでやることに

意味があると思っています。テレビは制作の人数がネットコンテンツと比べて多いので、みんなで議論しながら作るんですよ。対してYouTubeでは1人で撮って1人で編集して1人で出す。その強さや速さもあると思うんですけど、テレビでは「私はこう思ったけど、どう」っていうのを何回も何回もみんなで時間をかけて議論して、情報が間違っていないか、この表現が誰かを傷つけないかって、チームで作るコンテンツとしての役割は果たしているのかなと思ってます。

野中 正確性とか信用みたいなものは、いろんな媒体が増えたからこそテレビが担っていると思っています。制作会社の人間としては、テレビ以外の出しどころがめっちゃくちゃ増えて、しかも世界との距離が近づいたんで、テレビ離れとか言っても別にそんなに気にせず僕たちは頑張ります、みたいな現場の雰囲気はあります。制作会社が良かったと思うことは結構あって、結局サブスク系とかも作ってるのはテレビの人たちで、テレビで培ったノウハウはそっちでも活きるし、もしかしたらそっち側のノウハウがテレビに帰ってくるかもしれないので、そんな世間が言うほどわけて考える必要ってあるのかなと思ひながらやっています。

—— Tverの再生回数とかは気になりますか。

天宮 気になりますね。もうもはや視聴率と同じぐらい、その配信がどれぐらい見られるかっていうのは、制作陣は気にしていると思っています。「不適切…」の場合なのですが、3話くらいからTverとNetflixの配信がガンと

回って(視聴数が上がって)。多分口コミとかSNS上で面白そうって思ってくれた若い方とかが、見てくれたのが数字として表れていて、そうすると結果的に4話以降の視聴率が上がることがありました。ネットとテレビは全然切り離して考えてなく、SNS上とかネット上で話題になった作品っていうのが、結果的に地上波でリアルタイムで見えてみようかっていう視聴者の皆さんの行動に繋がってるっていうことが実感としてあります。

—— 未来のクリエイターへのメッセージはありますか？

野中 僕はバラエティは作品だと思ってなくて、「ブームを作ってこい」「話題になってこい」というような感じがあります。それはもう、テレビもネットもサブスクも何も関係なく、ムーブメントを起こすっていう目的にコンテンツ作るっていうのを結構大切に思っ

て番組制作をしています。突発的な発想とか面白いことを思いついたり気づいたりしたいなと思って生きている。**天宮** 日々視聴率がどうか、テレビの未来がどうみたいと言われて結構頭



を抱える日々が多いとは思いますが、根底に何か面白いものを作ってやるぞっていう、そういう気持ちさえあれば、視聴者の皆さんに伝わるのではないかと信じて自分はやっていきたいなと思います。ここにいる皆さんライバルだと思いますが、一緒にそういうふうに切磋琢磨してこれからもやっていきたいなと思います。

丸山 社会人を10年やってみて、色々な人を見て思うのは、好きな気持ちとか好奇心とか熱意とかに勝てるものってないなあと実感しています。「この放送局に通らなかつたら他の局に出してみよう」とか、「日本でダメだったら海外に提案してみよう」とか、「この話を世に出したい」という強い意志を大事にしていきたいなと思います。そのために「好き」を見つける。楽しいって思ったことは頑張って

みるとか、仕事以外でも「好きな気持ち」を見つけていただければいいなと思います。**柳田** テレビ業界はあまり資格もないので、業界に向いている人は幅広いと感じています。おしゃべりな人もそうでない人もいるし、アクティブな人もそうでない人もいるし。皆さんの個性を活かせる場所だと思います。皆さん自分の好きなこととか楽しいと思ったことを伸ばしていけば、どんな方でもなれる職業の一つかなと思います。

